

つけ／＼で訓練出来るものでもない。何か實際のこまがなければならぬ。そこが修身でなくて訓練たる所以である。落ちつけこまはしないで落ちつきを訓練せられるところ、そこがたゞの訓練でなく、生活訓練たる所以である。

かういふこまを特に言ふのは、幼稚園に限らず、子どもの訓練が一つの小さい行動に對して、こま／＼で行はれて、その裏の大きい本旨、目的をいつたものが考へられないのが通弊だからである。そのために、訓練が形式化したり、外面化したり、又、する方／＼しても妙に窮屈に、ぎこちないこまになつたりする。(こまいつて、本旨、目的をいふこまだけで、ばつ／＼して子どもが捉へ得ないようなこまは

誘導保育

第一週

年少組第二學期第一二週の本欄は、蟲に始まり蟲に終つて居て、興味を中心は實に蟲であるのに、年長組第二學期の本欄には、何ミ蟲の字の片影すらも見受けられないではない

かり言つて聞かせてゐる弊も一方にある。これも困る。此の保育案の訓練事項だつて、一々具體的に擧げてはあつたが、たゞにそのこま、そのこまを訓練しようとする列擧目錄ではない。もつ／＼大きく、一體幼兒は、さういふ風の本旨で訓練せらるべきかの、大目標があるのである。そこを見さめて貰はないミ、小乗訓練になつて仕舞つて、大乘訓練ではなくなつて仕舞ふ。大乘訓練あつての小乗訓練でなくては、たゞ口やかましく、こせ／＼した賤げに過ぎない。教育でもなんでもない。この點、しき御考へ願ひ置きます。

か。一つ園舎に居て、一方は蟲を中心に生活してゐる時に、たつた一歳しか違はない年長組の子供は、蟲に無關心で居られるであらうか、之はまたさうしたわけか、ミ、實際家はきつ／＼不審かられるに違ひない。是はさうである。蟲に對し

ての興味は、年少組よりはむしろ年長組の方が熾烈で、蟲の家等に凝される工夫も亦一段ミ精細なものである事は、あなたもご存じの事と思はれる。たゞ、この系統的保育案は、かなりの程度、むしろ殆んど事實に即した案である故に、こうであつた。この年は、直ぐ後に、學校全體ミしての或行事があつたので、幼稚園ミしてもそれに参加せねばならなかつた。それでこの人形の家の仕事も、是非それ迄に、大體完成さして置き度かつたので、第二學期が始まるや否やこの仕事に躰進した様の有様で、蟲に關しての遊びは、實に、自由遊びの形に於て放任されてあつたミ言つてもいい位である。次に年少組本欄に出て來る秋祭りに就ても、略々同様の事情で、自由遊びのまゝにせられた。殊にこの方は、昨年拵へた御輿も花傘も残つてゐるので尙ほの事である。遊ぶ事も、仕事の方も、年少組よりはすつミ濃厚になつて來てゐるのが事實である。以上の様な事情であつたミ御諒承頂き度い。

人形の家

藁が無くとも、まゝごミ道具は無くとも、まして人形の家が無くとも、發明家である子供は、隨時隨所、何物をも想像の坩堝の中に溶して、ただひたむきに遊ぶ。けれども自分の幼い時の記憶を辿つて見て、あの小暗きまでに茂つた杉林の中で、並み立つ杉の太木のあれこれに床高く棒を結びつけ、この棒の上に板を渡して一軒の家を拵へ、この中で、日暮れの來るのを恨めしく思ひながら遊び過したあの頃の思出が仄かに香つて來て、一つ子供達が専門に遊べる一軒の家を作つて、子供達を狂喜させて見様ミ心に決めた。まゝごミの家ミするのもあまり興無い事に思はれ、まゝごミにはきつミ人形がつきもの故、始めにもう人形を作つて、こゝの御主人ミして置き、この家を人形の家ミ名づけた。けれども所詮は子供等の、殊に女兒のまゝごミの家の家なのである。扱てこう決めては見たが、又迷つた。何處へ建てる？、幼稚園のお庭の隅の方の木立の間に、このお伽噺の様な家を建て、見度いミは熱望に堪えない事ではあるが、實際問題ミして、風雨に思ひのまゝにさらされても、いつ迄もイメージの様な家であり得るか、ミ考へて見た時に、この矢走る

考の前に立ちまらざるを得なかつた。そして考へた揚句には、暗かつたら又何ミか、ミ云ふ考で、保育室の中に、屋根もありドアもある一軒の家を、第一回の時は拵へて見た。二度目即ち系統的保育案を目論んだ時には、すつミ最初の理念を崩して、保育室の一隅に、一劃を區切つたものにした。

家の中の家具、調度、テーブル掛、敷物、窓掛、衝立、額、時計、植木鉢の果てに到るまで、先生ミ子供ミの協同作業であり、臺所に使ふ野菜類、魚介類までも製作しやうミの計畫なので、日々の仕事の悦びも又格別ではあるが、實際の仕事は仲々に忙しく、子供の仕事ミしてもかなり重みのあるものばかりである。

具體的な細かい計畫は、計畫欄に記載してある通り。今週は先生が主ミなつて、大體の外廓を作り上げる。今週の仕事は大きな仕事故、子供の參與する部分は極く少い。釘を打つミか、板を押へるのを手傳ふミか云ふ位の事である。

期待効果の一つは、やさしみの心——人形を中心ミしての遊びは、事柄ミ言へ、ものごし、言葉使ひミ言へ、見てる

ても微笑まれる位やさしみの籠つた情景である。お互同志が招かれたり招いたり、もてなしたりもてなされたり、の遊び事も皆やさしみの心なくては出来ぬ遊びである。かく遊ぶ事によつて尙ほもこの心が醸される事は確かである。

二には家の生活の興味。まゝミ遊びは徹頭徹尾家の生活の模倣である。三には觀察。——ミの誘導保育案、ミの製作も觀察なくしては出来ないものが多いのではあるが、この魚介類、野菜類等の製作には、觀察は實に重要な役割を演ずる。四には製作、——製作も、手技ミしての製作は勿論のこミ、製作に對してのオリヂナリテーミ云つた様のもものかなり啓發されるミころが多いであらう。

繼續作業時間は八週間ミしてあるが、その仕事に力を入れる程度にもよるであらうが、實はもつミ多くを豫期せねばならないかと思ふ。

第二週

敷物の下圖

子供の家の敷物であるから、敷物の模様は子供の繪の中から得度い、少くミ子供からヒントを得度いミ考へて、

この下圖決定前に豫備行動をしまして、度々、この主旨で子供達は繪を描くことを要求されたり、圖案みたいなものを工夫して欲しいと慾求されたりした。結局は子供の興味のある所を考慮しての、先生の案になつてしまつたのではあるが。

この時は、ズック布を使用した爲め、布のヘリを織絲のほつれぬ様、且つは裝飾用にも思つて、布の廻りをブルー色の毛絲でヘリ縫をした。ヘリから十五センチ位は入つて、ブルー、赤、ブルーと三色の毛絲の間を一纏位づゝおいて三筋、ずつと枠縫をした。それから二〇厘位間をおいて内側に、又ブルー、赤、ブルーの三色の毛絲で三筋枠縫をし、この二〇厘の間の所に、果物(バナナ、莓、枇杷、西瓜、パイナップル、瓜、みかん)の形をそれぞれの色の布で切抜いて之を縫ひ込んだ。

果物を布に切抜かせる爲にも、果物の各種類を網羅しやうと思つたり、又敷物に縫込む爲の、果物の大きさの概念を與へたりしたいと思つて、この又豫備行動をしまして二三回果物をミ注文して自由畫を描かせて見た事であつた。

今週はつまり敷物については、下圖決定前の豫備行動を

しての自由畫を、それから下圖の構圖が決まつて後、この爲の豫備行動をしましての自由畫が度々なされたわけである。

額、衝立の下圖

額の中にはめられる繪、衝立に描かれる繪は、子供の繪でなければならぬ事をして、その繪を物色する爲に、之又、果物、人物、景色に廣い範圍に互つて自由畫をさせた。

第三週

敷物

愈々今週から敷物の實際に取りかゝつた。太い毛絲針に太細の毛絲を用ひた。布はズックを使用した。ふち縫、枠縫をする所はチョークで線を引いて置く。縫ひきる所がかなり澤山あるのに、子供の興味繼續時間は至つて短く、又絲を通してやつたり、もつれを直して見たりで、なか／＼思ふ様にはかされない。男の子も縫ひ度さうな面持で見てるるしするから、男子の一生一度の思出にもと思つて、男兒にも躊躇する所なくさせて見た。

お月見

年少組の所に思ふまゝを記したれば、こゝには省く。輕

唱歌遊戯

視したわけではなく、年少組も重複する故の省略である
事を諒解して頂き度い。

第一週

唱歌 二回

長い夏休みを終へて、子供たちは休暇中の個々の生活から幼稚園の集團生活へはいつて行く時、「お友達と一緒に云ふ楽しみ、喜びを殊に強く感じるに違ひない。

お友達と一緒に楽しく今までに習つた歌を思ひ出しながら歌ふのもよし、又一人づゝ好きなものを歌つて、みんながよき聴手になるのもよい。

ふざけたり、きなる様な聲を出す事は、初めからの約束としてしない事にしよう。

お池の緋鯉(童謡唱歌名曲全集)

遊戯 二回

今までのおさらび。

第二週

唱歌 二回

雀のお宿(小學唱歌七十一曲集)

年長組の今頃になれば、一人でも歌詞、曲共に正しく歌へる様に、はつきり感えさせる事が必要である。殊更に發聲法を教へないまでも、姿勢を正しくして、よく口

を開けてきれいな聲で歌ふ様に、そうしてこゝで息を吸ひませうと段々に正しい歌ひ方にまで導びく様にした
い。

時には子供たちが交代でコンダクターとなり、タクトを
まらせて歌つて見るのも面白く、それに依つてだんぐ
に拍子を理解する様になる。

遊戯 二回